

高ぶる者とへりくだる者（チャペルメッセージ⑧）

二人の人が祈るために神殿に上った。一人はファリサイ派の人で、もう一人は徴税人だった。ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った。『神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。』ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを憐れんでください。』言うておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。
(新約聖書・ルカ福音書 18 章 9～14 節)

ここにはイエスが語った一つの譬え話が記されています。二人の人物が祈るために神殿にやって来ました。一人はファリサイ派の人物で、もう一人は徴税人でした。ファリサイ派は律法に熱心なユダヤ教のグループであり、彼らはいわば庶民のリーダーたちであって人々からも尊敬されていました。一方の徴税人は、支配者であるローマ人の手先となって庶民から不当に税を徴収しているという理由から、ユダヤ社会においては軽蔑の対象でした。すなわち、この二人は対照的な位置づけにあったわけです。

ファリサイ派の人物は祈りの中で、自分が真っ当に生きていることに感謝しつつも、罪の自覚はまったくなく、自らの功績を誇示しました。それに対して徴税人の方は目を天に向けようともせず、打ちひしがれた様子でただ一言、「罪人の私を憐れんでください」と唱えました。すでに自らの罪を十分に自覚し、自分には何も誇るべきものがないと考えていた彼は、ただ神に憐みを請うたのです。そしてその結果、ファリサイ派の人物ではなく徴税人の方が神に義とされた（救われた）というのです。

ここでは何より、傲慢にならずに謙虚に生きるように勧められています。しかしながら、謙虚に生きるというのは実際には非常に難しいことなのかもしれません。考えてみますと、人間同士の争いのほとんどは、他人より自分の方が優れているという思いから起こってくるように思えてきます。特に自分より劣っていると見なしている人から軽視されると、私たちの心の中には「許せない」という感情が起こり、そこからさまざまな確執が生まれてきます。それぞれがもう少し広い心をもってお互いを見ることができれば、おそらくそうはならないのですが、実際にはそれがなかなか難しいのです。

もちろんこういう意見に対しては、「へりくだってばかりいると馬鹿にされる。今の時代、しっかりと自己主張しなければ生きていけない」というような反論も出て来ることでしょう。実際、国家間の外交問題でも、下手に出るとなめられるので、相手に弱みを見せず、国の威信を誇示すべきだと考える国がほとんどです。しかしながら、そのような考えに捉えられている限り、本当の意味での平和は訪れないでしょう。もちろん自分に自信をもち、プライドをもつことはある意味で大切ですが、それが自己正当化、他人への蔑視に繋がるようであれば意味がありません。やはり謙虚な姿勢で他者に接しようとする姿勢が私たちが生きていく上でどうしても必要であるように思えるのです。

このへりくだりの精神は、何より関学の「マスタリー・フォア・サーヴィス」というスクールモットーにも言い表されています。人と社会に仕えるために自分自身を成長させていく。そのような生き方を実践していくためには、やはり他者をも重んじ、謙虚な姿勢を保つことが必要となるのではないのでしょうか。